

3 新潟市西蒲区弥彦山沖発見の珠洲焼

本資料6点は、平成24（2011）年4月に情報提供があり、文化財センターで資料化を行ったものである。新潟漁業協同組合西蒲支所に所属する2人の漁師によって、底引き網漁中に引き揚げられた珠洲焼で、いずれも北緯37°43′59″・東経138°41′39″、水深200mの地点で網に掛かったという。引き揚げられた年月日は定かではないが、Y氏が引き揚げた4点（図4 3～6）のうちの2点は平成19年の中越沖地震前、残りの2点とT氏が引き揚げた2点（図3 1・2）は地震後とのことである。

1は珠洲焼の小型壺である。口径9.7cm・底径7.6cm・器高20.5cm。口縁部は「く」の字状に外反し、強くヨコナデされている。胴部はいかり肩気味の器形で、内外面のロクロメは顕著である。肩部には8～13条1単位の波状の櫛目文が3段施されている。底部は静止糸切りである。内外面に貝殻の付着がみられるが、内面の方がやや少ない。2～6は内面に「米」状の卸し目をもつ珠洲焼の片口鉢である。いずれも貝殻のような付着物はほとんどみられず、器面が少し摩耗している。2は口径29.8cm・底径11.4cm・器高13.0cmで、口縁部が一部欠損している。口縁部は外面に面をもち、胴部は内湾気味に開く。卸し目は10条1単位で、「米」状に加えて口縁部近くの1か所に短く横位に施されている。3は口径30.4cm・底径11.8cm・器高11.8cm。口縁部は外面に面をもち、胴部は内湾気味に開く。卸し目は16条1単位で

ある。4は口径30.7cm・底径12.0cm・器高11.6cm。口縁部は外面にやや丸みを帯びた面をもち、胴部は直線的に開きながら上方で内湾気味に立ち上がる。卸し目は8条1単位で、「米」状に加えて2か所に短いものがやや雑に施されている。5は口径31.2cm・底径11.6cm・器高13.6cm。口縁部は外面に面をもち、胴部は内湾気味に開く。卸し目は10条1単位で、「米」状に加えて口縁部近くの1か所に短く横位に施されている。外面に製作時に付いたと思われる沈線状の傷がみられる。6は口径30.8cm・底径11.2cm・器高12.7cm。口縁部は外面に面をもち、胴部は直線的に開きながら上方で内湾気味に立ち上がる。卸し目は16条1単位である。

以上の6点は、吉岡編年のⅡ期の所産と思われる、出土地点も同じということから、同一の船に積み込まれた可能性が高い。本地点は「寺泊タラバ」の範囲であり、そこから揚ったとされる珠洲焼がいろいろなところで確認されているが、特に一括性の高い海揚げり資料は生産地と消費地との関係や流通システムを捉えるために有効な手段となり得ることから、情報の集成・分析が望まれる。

なお、5・6の片口鉢は、情報提供直後の平成24年6月5日にY氏から新潟市が譲受を受け、現在新潟市文化財センターで収蔵・展示している。（渡邊ますみ）

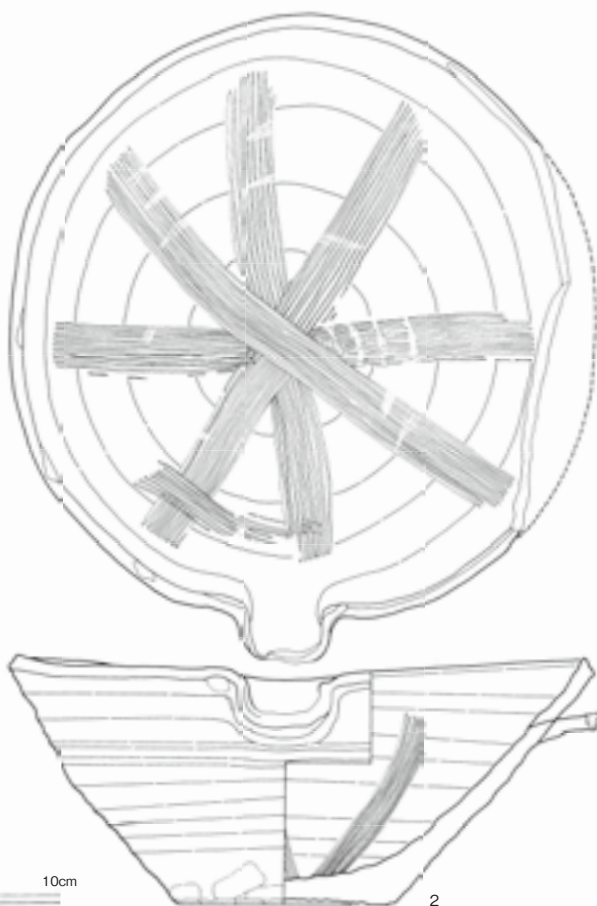
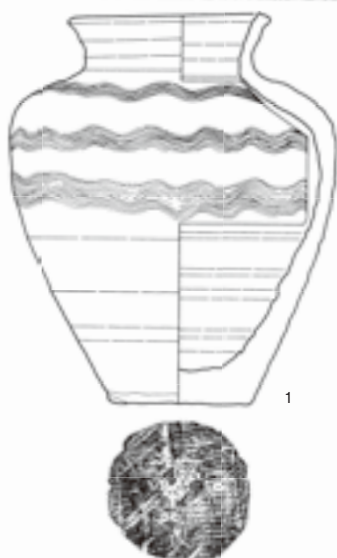


図3 珠洲焼実測図1（1/4）

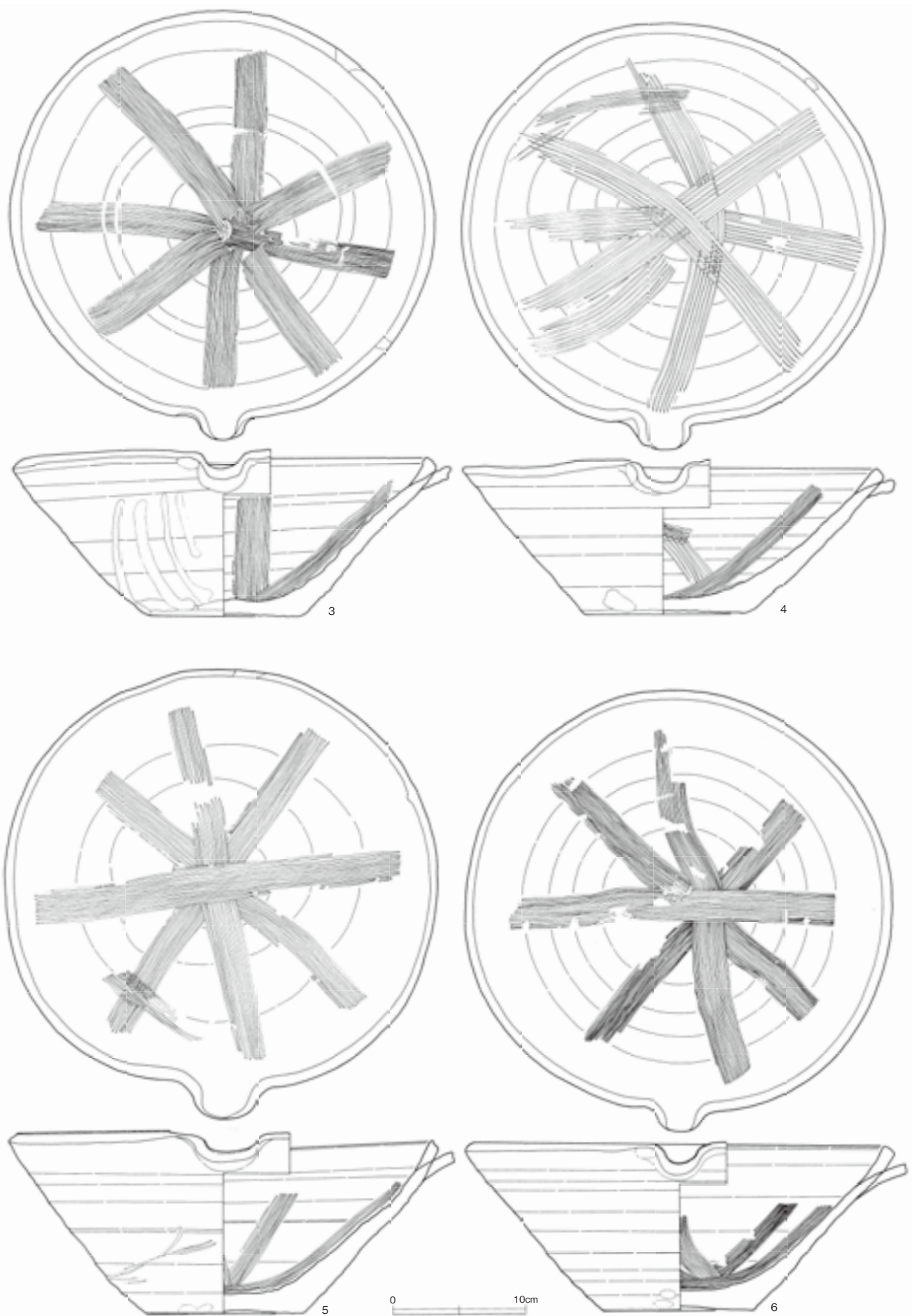


図4 珠洲焼実測図2 (1/4)